

# 美術科教育学会通信

1995年7月7日発行 : 美術科教育学会本部事務局 No. 17  
〒184 東京都小金井市貫井北町4丁目1-1 東京学芸大学 美術科教育学研究室  
TEL. 0423-25-2111 (内) 2856, 2857, 2858 FAX. 0423-21-3695

## 1995年からの所信

学会代表理事 宮脇 理

過ぐる3月、和歌山における学会が関係各位のご努力、ご協力によって盛会裡に終わりましたことに、まずは拍手を送りたいと思います。

これも昨年6月に公開シンポジウムをプレ学会として実施し、現在、斯界が当面している現代史的難問をフォーカスし、解決の糸口を見出そうと真摯な教育への運動(論)を展開された長谷川哲哉、永守基樹両理事、並びに関係者の努力が優れた実りを生んだものと思われまふ。

さて3月の新理事会の決定により学会代表を続投する事になりました。3年前に代表をお引き受けした際は、学会生成の過程から状況判断して学会の「充実」を運営方針として掲げましたが、このことは本学会の初志・マニフェストを継承し、かつ組織の整備・運営を進めることが当面の課題であると願ったからでありました。

学会としての常識的な態勢すなわち形式や形態を整える事は「充実」の必要な段階ではありません。しかしそれ以上に重要なのは創設時のダイナミズムな運動を維持し、発展させることであると判断いたし、すでに周知の「公開シンポジウム」の発足を関係者、とりわけ旧理事各位の積極的な協力、さらに云えば一種の「気概」によってここまで進めてきた次第です。この公開シンポジウムを通称「出前シンポ」と呼称しました趣意には、これまでの常識的な啓蒙主義・運動を彼岸とし、そのためには職域を異にする場を相互に共有し、かつ共生したいという考えがあり、事実3年間にわたり12会場にて開催されたシンポジウムには、このことに関わって実にさまざまな問題が提出され、解決のための萌芽が示されてきました。そしてこれらに共通する意識にはこの運動を支えるに相応しい意欲と気概が不可欠なこと、しかもこの根拠を奈辺に求めたら良いのかという問いには、学会活動においてしばしば指摘を受ける、いわゆる業績主義を超えた意識を感じることができました。

しかし同時に、今世紀の特徴とも見られる拡張の論理や方法が実に根深く浸透し、その残滓がいたるところに拡散している現状をあらためて窺い知る機会でもありました。

例のバックミンスター・フラー(R. Buckminster Fuller 1895~1983)等の立場から見れば実にナンセンスともとれる、この国に流れ、固定している風潮、例えば自己に都合の良い「壁」を設けて価値を唱い上げる自己防衛と闘争習癖や、年齢の如何に関わらず同類の囲い込みを行い、他を非難する事で自己保存が可能であると本気で信じている品性皆無の思考、さらには近代化が齎した過誤の集積を前にして、ただただペシミックに振る舞うことで事態の解決を願う意識などですが、これらを払拭させることがどれほど困難であるかも実感として伝わってきたことも確かでした。

一般に近代社会の形成についてはホブスやロックなどの発想が原型になっているともいわれており、時間がずれながら東アジアの一端に位置するこの国も影響を受けていることについては、私もしばしば芸術教育に関わって別の場所で述べてきましたが、その特質を端的に言えば、《自己保存》つまり生存としての基本権と権利の派生、そしてこれらを保護する筈の調停役であった国家が個人の存在を侵すといった、近代国家成立の過程に付

きもののパラドックスがあるのを 見過ごし、この状況を据え置きしたままで、しかも手垢の付いた知識（知ではない）をもって次の段階へ進もうとしたところに、行き場のない「共同体」妄想に落ち込んだとみられます。研究機関における昇任、任用期限、大学解体・改革などが取りざたされれば、それこそ自己の誇りや尊厳などは低次の思考や方法に流れてしまう事は推量されるどころです。

古くから存在する個の優越願望は近年の権利意識が逆に増幅させたかも知れぬと思うほどですが、これまで述べた矛盾を解決しようと決意するならば、ひとつまみの教養主義をもってしては不可能に近いと思われまふ。先に私は通常云われる啓蒙主義を「時間切れ」として彼方へ押しやってきましたが、仮に啓蒙主義という言葉を更新して使うならば、「自己の尊厳」の自認と「人間相互の尊厳」を共有するにふさわしい「場」の設定こそが必要でしょうし、その場とはマスメモクラシー、大衆民主主義、さらに云わせてもらえば納税者の全てを対象とするデモクラシー社会を射程に入れたところに、エメラルドにも似た教育の場とその可能性があると想定したに他ありません。

さて「学会」については近時の「通信」に幾度かその定義について語られていますが、あらためて学会という組織が生存権、人権、権利の主張に満ちた現代民主主義と琴瑟な関係を結び得るほどに開明的かどうかは、漸時間われることになると思いますが、既に部会の中でネットワーク理論を背景に置いた「基礎データベース構築部会」を突出させたのも、以上に関わって理由のあるところなのです。

かつて脱学校論のイヴァン・イリッチが個から個へのコミュニケーションのために、誰にも関与されない電話による〈ウェブ：「機会の網状組織」(opportunity web)〉を提示したのはよく知られていますが、あれから幾ばくかの年月しか経っていないにもかかわらず、それとは比較にならぬ程に方法論は進展しています。個々が人間相互を尊重するという事実の実際はきわめて困難なことですが、このことはとりもなおさず現代史が求めている次なる共同体への願望であり、それはかつて人類が経験してきた様々な共同体とは異なることはいうまでもありません。その為の方法論の探索は避けることのできない事でしょう。私見として来るべき社会の到来にマスメモクラシーを指定した事は、すでに大衆が妥当な手続きによって法をも変え得る時代を迎えているということであり、普通の人々の力が文化の質をも左右すると云うことです。既に旧聞となりました周知のアメリカ合衆国における芸術教育不要論が燎原の火のように拡大したことと、それへの反撃すなわちComing to Our Senses運動の経緯などには、大衆の力が教育そして文化の命運を握っているということの証明でもあったことを思いだします。明白なのはそこで展開された「啓蒙運動」はひとつまみの教養主義で牽引しようとする事とは決定的に異なる発想であり、幾たびか出てくる「納税者の反乱」への対応にそれはよく表れていました。

ところで思い出されるのは40年前の1956年(昭和31)に周郷博さん(すごう ひろし 1907~1980)が、H. リードの『芸術を通しての教育』にかかわる講演をされたとき、SavoirとConnaitreの概念を用いて新しい教育と芸術の関係を提示され、教育とは単なる知識を積み上げる前者の概念ではなく、後者すなわち文化とその媒体を方法として用いながら、それを通して知を築くというのが結論であったと記憶しています。しかし周郷氏は「芸術がわからない……戦前の悪い教育を受けていたものですから……」と発言、それはいまだ未整理のまま、学習社会論、生涯学習論そして制度としての生涯教育の時間帯に入り込んでいるのが実状でしょう。大多数の普通の人々が学校で行う芸術がいまだに解らなければ、納税者の判断の帰結は何処へ向かうかは明白です。さきに否定的な意味で「業績主義」を扱いましたが、新しい啓蒙運動がその根底にあるならば、その「業績」はすでに評価されるべき運動としての業績であると考えます。紙数がつきますので以上1995年からの所信の一端を述べてご挨拶にかえます。

1995/06/26

## 新役員が決まりました

役員改選の結果、次の方々が新たに役員に選出され、3月の総会で承認されました。また、それを受けて、新役員会で代表理事（◎印）と2名の副代表理事（○印）が選出されました。以下の通りです。

### 《理事》

赤木里香子（岡山大学） ○石川毅（東京学芸大学） 稲嶺成祚（琉球大学）  
岩崎由紀夫（大阪教育大学付属平野小学校） 上山 浩（宮崎大学） 大勝恵一郎（元・神戸大学） 大橋皓也（前・上越教育大学） 岡崎昭夫（宇都宮大学） 金子一夫（茨城大学） ○花篤実（大阪教育大学） 佐久間敬（福島大学） 柴田和豊（東京学芸大学）  
鈴木寛男（奈良芸術短期大学） 竹内博（宮崎大学） 武田薫（北海道教育大学旭川校）  
仲瀬律久（筑波大学） 長田謙一（千葉大学） 長町允家（大阪教育大学） 永守基樹（和歌山大学） 橋本泰幸（鳴門教育大学） 長谷川総一郎（富山大学） 長谷川哲也（和歌山大学） ふじえみつる（愛知教育大学） 堀典子（横浜国立大学） 増田金吾（東京学芸大学） 宮坂元裕（横浜国立大学） ◎宮脇理（元・筑波大学） 村上暁郎（武蔵野美術大学） 吉井宏（福岡教育大学）（50音順）

### 《監事》

浜本昌宏（三重大学） 東山明（神戸大学）

## 総務会の報告

正・副代表理事と本部事務局担当者などで構成される総務会が、6月17日に行われました。「今後の活動方針」「学会大会について」「学会誌・学会通信の在り方」「学会史編纂」「公開シンポジウムの予定」「部会の承認」などが話し合われましたが、その中で重要な日程が決まりましたのでお知らせします。

来年3月に武蔵野美術大学で行われます学会大会の日程は、3月27・28・29日を予定しています。

今年度公開シンポジウムの予定は、9月から12月にかけて横浜、大阪、東京、愛知で開催されることになりました。詳細は後日お知らせします。

そのほかの案件につきましては、8月末の理事会で議論する必要のあるものが多く、次号の学会通信で報告の予定です。

## 理事会の予定

理事会が8月28・29日の日程で、べんてる本社会議室で開催される予定です。できるだけ会員諸氏の意見を反映したいと思いますので、懸案事項がありましたら、8月20日頃までに本部事務局までお知らせください。役員の方々にはあらためて通知いたしますが、夏休み中のタイムスケジュールにお加えおき下さい。

## 他関連学会の案内

第44回日本美術教育学会学術研究大会《京都大会》が下記の要領で開催されます。

大会テーマ 「人間のいのちと美術教育」 — 人間存在・価値観・環境 —

日時：1995年8月8日・9日 場所：京大会館

問い合わせは、仏教大学・教育学部・教育学科 大橋研究室

京都市北区紫野北花ノ坊町96

☎ 075(491)2141(代) Fax.075(493)9040

## 『アート エデュケーション』誌・論文募集

造形美術教育の専門研究誌『アート エデュケーション』（建帛社発行）では、下記の要項で、特集テーマ「美術教育の歴史的研究—その意義と可能性」に関する論文を募集しています。会員の方々の投稿をおすすめします。

特集テーマに関する論文なら内容を問いません。歴史的資料の発掘や文献資料にもとづく実証的研究などはもちろん、昔の教科書や指導書にもとづいて授業実践をした実践研究や、日本と諸外国との比較研究、また美術教育史研究の理念や方法そのものを考察する研究など、ユニークな視点からの論考を期待しています。

なお、論文掲載の可否は、「アート エデュケーション論文審査委員会」（代表：宮脇理、花篤実）の審査を経て、決定されます。審査結果は10月上旬に投稿者に通知されます。

○締め切り：1995年8月末日（当日消印有効）

○枚数：400字詰め原稿用紙で30枚以内（12,000字、図版含む）

○形式：横書き。注などの示し方については『アート エデュケーション』25号を参照ください。

○送り先：建帛社編集部 本間久雄

〒112 東京都文京区千石4-2-15 ☎ 03-3944-2613 Fax.03-3944-1986

## 名簿・会計関連のお知らせ

### 1. 新入会の方々（入会順）

井上 浩、三浦 浩喜、大脳（おおつき）潤子、日岡 健二、井坂 健一郎、蔵西 東黄、大塚 謙一、大塚 由紀子、佐々 有生、春野 修二、堀井 武彦、富田 真矢、村田 千秋

### 2. 住所不明の会員の方々

次の会員の住所がどうしても分かりません。ご存じの方はお知らせ下さい。

長井 肇、中松 満始、森本 昭宏、森戸 和美、豊島 和加子

住所などを変更された方は、葉書など文書にて「本部事務局・増田金吾」宛ご一方下さい。

### 3. 会費納入のお願い

本年度（1995年度）の会費の納入をお願いします。今回の学会通信をお送りしました封筒の宛名ラベルの最下行に、各会員の会費納入状況（1995年6月16日現在）が記されています。各自ご確認の上、未納分を郵便局備え付けの「郵便貯金総合サービス」用の振込み通知票にてお願いします。

〔口座番号〕10050-64710321

〔加入者名〕美術科教育学会本部事務局 会計担当 増田金吾

宛名ラベル最下行の【 】内の数字の意味は次の通りです。

【93,94,95】-93,94,95年度分が未納 6,000円+6,000円+6,000円=18,000円

【94,95】-94,95年度分が未納 6,000円+6,000円=12,000円

【95】-95年度分が未納 6,000円

【95済】-95年度分まで納入済み 0円

なお、賛助会員の年会費は20,000円です。

### 4. 退会処置について

「学会通信15号」でも報告しましたが、会費の長期滞納者は、たいへん残念ではありますが、退会して頂くことになっています。1993年度分からの会費未納者は、特にその点ご注意ください。